

批評と紹介

郭明昆氏遺著

中国の家族制度及び言語の研究

江 頭 広

—

本書は元早稲田第二高等学院教授 故郭明昆氏の一九三一年（昭和六年）より一九四八年（昭和十八年）までの十二編の論文を李猷璋氏等が纏められたものである。その内言語学上の論文である「華語に於ける形態觀念」「福佬話方言的研究」「福佬話方言に於ける及と与について」の三篇については他に述べる方もあると信するので、上記三篇を除く儀礼喪服及び家族制度に関する九篇について述べて見たい。

第一篇、「儀礼喪服考」では、郭氏は、斬衰・大功・削杖は、齊衰・小功・苴杖を本にした新案である事、受服の規定や尊厭の降服の規定に於いて、また君臣関係の従服の規定に於いて、喪服篇は古いものではないこと、更らに広大な範圍に亘る喪服者の身分関係を組織的に網羅していることも新しい発達であることを述べて、喪服篇が「荀子」礼論篇以後、

戦国末期に編成されたものであるとする。

第二篇、「喪服経伝考」では、経の喪服制は家族的身分関係の親密度に応じて等差を定めたが故に、その服喪理由を述べぬのに対し、伝は相互に同等の喪に服すべき場合でさえ、強いてこれを二分して、別々にその服喪理由を述べていること、その従服・名服の説明に、異姓外親に対しては本来の服喪義務を認めぬ血族宗親思想が現われていること、従降の説に於いても、「慈母・孝母」の服喪理由として、「父老子之天也。」という父権思想を強調していること等より見て、経の趣旨を忠実に伝えていない事等を述べ、更らに経は戦国末期、記は漢儒、伝は更にそれ以後の漢の武帝時の作とする。

第三篇、「祖父称謂考」に於いては、「祖」は *decan* を意味するが故に、「祖父」とは、「祭られる父」の意味であるという。

第四篇、「父母称謂考」では、その起原は、「父」が「甫」とも記され、先儒皆これを「丈夫之美称」であると説き、冠礼で始めて「父」「甫」と称されるから、原初の年齢階級であること、最初は直系・傍系共に「父」「母」と合同的称呼を用いたものが、時代が下るに伴い、父母は直系のみを意味し、傍系には他の称呼が用いらるに至つたのは、累世同居の大家族制度が崩壊して小家族になつたことを示すものと見る。

第五篇、「伯叔姆嬭考」は、傍系尊属親たる父の兄弟の称谓は、最初は「父」に合同せられていたのが、「伯父」と「叔父」とに分化し、更らに「伯」と「叔」とに略称された。父の兄弟の妻も、記述的な複合称谓たる「伯母」と「叔母」とで称谓されていたのが、「姆」と「嬭」という単音字の叫呼称で称呼されるようになった事を明らかにする。

第六篇、「姑姨舅始と漢族称谓制の側面史」及び、第七篇、「甥姪称谓と漢族称谓制の側面史」は著者の最も力を注いだものであるが、先づ第六篇に於いては、

(1) 漢族の親族称谓制度は、原初は傍系併合制であつたが、戦国時代には既に傍系制に進んでいた。前者は氏族制度社会組織と姑舅表婚とを反映し、後者は家族制度を中心とする社会形態に適應せるものである。

(2) 家族制度が固定して以後、称谓の形態論的側面には根本的な変化がなく、依然傍系制を持続してきたが、六朝から唐代にかけて父権の大家族組織に順応せる称谓制の特色が顯著に現われた。そして最近代に至つて大家族組織が崩壊に傾くと同時に称谓制にも幾分の動搖があらわれた。

(3) 母舅の妻と姑の夫に対しては、原初は、potential dateであつた為めか、一方的な姑舅表婚制の下にあつては、特定の称谓がなかつたが、傍系制の時代になつて、「舅母」「姑丈」又は「姑夫」の複合語で称谓され、「舅母」は後

に縮約されて「妯」となつた。

(4) 婦人が一世輩低く、子に従つて夫族姻戚を称呼する風習が大家族父権時代にはあつた。例えば、夫の兄弟(伯・叔)、夫の嫂(姆)、夫の弟婦(嬭)、夫の父母(公・婆)、夫の伯父母・叔父母(伯公・伯婆・叔公・叔婆)等である。これはその時代に於ける婦人の隷属的地位を反映するものであるが、父権の大家族制の崩壊の趨勢とともに、称谓の上に於ける婦人の地位も向上し、漸次夫に従つて称呼するようになってきた。例えば、夫の兄弟とその妻を、哥々・弟々・嫂子・妹々と呼ぶ。その結果、叫呼称の上では婦人の用うる称呼は、漸次、父家の親族と夫家の姻族とを区別しないようになつた。これは又女権の伸長を示すものである。

等の事を述べ、第七篇には、父の姉妹を姑といい、その姑が我が兄弟の女子を姪と呼び、母の兄弟を舅と呼び、その舅が我が姉妹の男子を甥と呼んだのが、甥姪の原義であること、次には甥も姪も男女共に傍系卑親族に対する称谓として用いられたこと、「叔姪」が晋代に始まつたという従来の説に根拠がないこと、戦国時代には既に傍系併合制から傍系制に發展していたこと等がのべられている。

第八篇、「福佬話方言に於ける親族称谓の二三について」は、「丈夫」「珠婦」「翁」「婦」「孖姪」「学生」等の話について述べ、第九篇、「称呼と命名の排行制について」には、排

行についての精密な研究が見られる。

二

本書は、郭氏の十二篇の論集であつて、体系的叙述ではない。従つて、重複せる点も少くないので、先づ概括的な特徴をのべ、後に二三細部について述べて見たい。

先づ第一に、同一の親族関係について、中国に於いては、叫呼称・説明称と記述称との三者がある事を述べているのは、大きな特徴の一つである。被称者に対面して、称者が第二人称的に呼びかける場合と、被称者を間接に第三人称的に他人に説明する場合との間に形式的区別があるのは、Rivers等が既に注意したことであるが、この二種の区別の外に、中国には更に信書や他の文章に書き記す場合の形式が存在する事を無視してはならない。郭氏は、この三者をそれぞれ、対面叫呼称・白話明称・文語記述称と呼ぶ。例えば妻の兄をそれぞれ、「阿哥」「大舅子」「内兄」と呼ぶ如きである。

第二に、称谓の歴史の変遷の研究である。第四篇の「父母」、第五篇の「伯叔婚姻」、第六篇の「姑姨舅姑」、第七篇の「甥姪」に関する、周・漢・魏・六朝より現代に至るまでの称谓の変遷の研究は、現在まで何人もなさなかつた所であり、本書の中心をなすものであるといえよう。そしてその副次的な産物として、前述の妻の夫族に対する称谓が、父権的

大家族制の時は、己の子に従い、小家族制となつては、夫に従うという興味ある説を述べている。

第三に、これに關聯して現代に於ける称谓の研究がある。

これは著者が台湾の出身という特殊な事情にも基くと思うが、第八篇の「福佬話方言に於ける親族称谓について」の研究も含めて、第一・第三・第九の諸篇を除く各篇に亘つて述べており、編者はこれを「やや煩瑣な記述」としているが、言語が絶えず変化するものである事を考えれば、極めて貴重な資料である。

第四 は親族称谓制度上より見た称谓の変遷である。R. H. Lowie は親族称谓制度の型を

- (1) 直系親と傍系親とを区別しない世輩制 (generation system)
- (2) 傍系親の一半だけを直系親と区別する傍系併合制 (collateral merging system)
- (3) 各種の傍系親を区別する傍系制 (collateral system)
- (4) 傍系親を直系親からのみ区別する直系制 (lineal system)

と分類するが、郭氏は太古の漢民族の称谓制は、正しく傍系併合制であり、これが傍系制に進むものであるとして、「舅姑」「甥姪」「伯叔」をこの原則によつて説明する。例えば「舅姑」について、儀礼喪服篇・爾雅釈親篇等に「世父」

「伯父」「叔父」というのは、基本称谓の「父」に限定的形容語を附加した複合語であり、同様に前記諸経に「従母」とあるは、最初は単に「母」と称んだのが、後に特に傍系親として区別する為に、「従母」という複合的な組み立ての称谓が出来たと推定される。以上の推定によると、太古の漢族の称谓では、傍系尊属の称谓に於いて、僅かに「舅」と「姑」の二称谓しかなく、父の同性同胞たる父の兄弟はなお父の如く、母の同性同胞たる母の姉妹はなお母の如く称呼されたものである。そして父の兄弟は戦国末に「伯父」「叔父」とその長幼によつて区別され、遅くとも魏晉以後は「伯」「叔」となつて、傍系併合制より傍系制となつた。母の姉妹については、例えば左伝に於て既に「姨」とよび、また「姑」には父の姉妹の義の外に「夫の母」「妻の母」の義が生じたが、爾雅親に「妻之父為外舅、妻之母為外姑」と別称し、北宋の丁度等の撰による集韻に、「俗謂舅母曰姑」とあつて、「姑」と呼ばれ、各種の傍系親を区別する傍系制となつたと説明される。以上の論は郭氏説の中心をなすが、時代が下るに伴つて、各種の傍系を区別する傍系制による親属称谓が増した事には、前述集韻の「姑」の例を見ても異論はないが、郭氏の立論には多くの難点があるのではないだろうか。

何よりも「太古の漢族の称谓制」とは、何れの時代を指すかが明らかでない。立論の為に引用された諸経は、儀礼喪服

篇・爾雅親親篇等であり、郭氏の説によれば、儀礼喪服篇中の經文すらも戦国末期の作であり、凡て戦国以後に著わされたものであるから、「中国の太古」から傍系併合制であつたという立論は先づ推論に出るといふの外はない。次に例えれば、「姑」には「父の姉妹」「夫の母」「妻の母」の三義があるが、何れも爾雅に見え、前後の關係が明らかでなく、傍系尊属に対する称谓として「父の姉妹」たる「姑」のみがあつたという説は必ずしも成立しない。特に「夫の母」「妻の母」が同一称呼で称される為めには、郭氏のいう姑舅表婚の存在を前提とするが、郭氏はこの姑舅表婚(cross cousin婚)の存在を認めているから尚更ら「父の姉妹」の「姑」が「夫の母」「妻の母」の「姑」に先行するという説は成り立たない。次に、左伝襄公二十三年に、「継室以其姪、穆姜之姨子也。」とあり、孔疏に「摠父言之、謂之姨。摠子言之、當謂之從母、但子効父語、亦呼為姨。」というによれば、左伝に母の姉妹を姨と言つた例がある。左伝の成立については未だ定論はないが、郭氏は津田左右吉氏の説に従つて前漢末期の作と考えられる。しかし、例えば戸田豊三郎氏・鎌田正氏等は、戦国中期の作とする如く、異論の存するところである。二氏の説にも問題があるがそれはとも角として、儀礼喪服や爾雅親親の「従母」の称谓と「姨」との両称谓の何れが先行するかは疑問であらう。更らにまた郭氏は、

儀礼喪服篇や爾雅親篇に従母という複合的な称谓語が現われているから、母と母の姉妹との傍直系の区別も、また遅くとも儀礼喪服篇の編作された戦国末期までは行われていたのである。

という以上、

戦国末には既に Lowie の分類に於ける第二型たる傍系併合制から第三型たる傍系制に進展してたのである。

という結論を出すのも無理であろう。

次に父の兄弟を父といい、母の姉妹を母という問題については、甲骨文に父の兄弟を父と称する事は多父称谓から見ても明らかであるが、母の姉妹が多母称谓と一致して母と称されるか否かは、未だ明らかにされていない。例えば、武丁時の諸母に、母丙・母己・母庚・母壬・母癸があるが、これについて陳夢家氏が、

武丁卜辞の諸母、除了母庚是小乙的法定配偶以外、其他有的可能為小乙的非法定配偶有的可能為小乙輩陽甲・盤甲・小辛的配偶。

というによれば、前記諸母が姉妹であるか否かも不明である。そして母の姉妹が母と呼ばれる為めには、その全部が母の腰となつて父の許に従嫁するか、完全な cross cousin 婚が行われた時かの場合にのみ始めて成立するのである。要するに、姑と舅が傍系尊属の称呼として、最古の形式であり、

且つこれ以外は全く無かつたという論断が問題であり、この点に関しては今後研究さるべきであつて、従つて傍系併合制と傍系制の何れの型が、中国最古の親族称呼の形式であるかは簡単には決められない。

郭氏の研究の第五の特徴は、排行に関する研究であるが、これは後に述べる。

ただ郭氏の研究に於て遺憾な点は、これ等の諸論文に W. H. R. Rivers, A. L. Kriber, R. H. Lowie 等の学説を折角導入しながら、この方法論を最も必要とする場合に、或は意見を保留し、或は推論に止められた場合が多いことである。例えば、「嫂叔無服」の問題については、「遠古の婚姻形態に由来するか否かは、慎重な研究に値する。」と述べるが、日本に於ける中国社会研究に、その古代たると近代たるとを問わず、社会人類学的研究方法を採り入れた人は極めて少ない。その故にこそ、かかる問題についての郭氏の説を聞きかたつたのである。

これに関連する二三の問題を取り上げて見よう。先づ郭氏は、「史記」五帝本紀の舜象伝説、淮南子汜論の「孟卯妻其嫂」等の例をあげて、中国に於ける levirate 婚の存在を主張する。この形式の婚姻は、「左伝」にも多く見え、「通」なる語を以て非難されているが、中国古代に於ては必ずしも禁ぜられた行為ではなく、宇野精一氏は、春秋中期に道德意識

の変化があつたのではないかと述べている。私も亦中国古代には *levirate* 婚が存在したと考える。更に所謂媵婚が *sororate* 婚である事は、加藤常賢氏が既に指摘している事であり、この両婚が中国古代に存在した事は疑いない。しかし、郭氏はこの両婚の存在を根拠として、R. H. Lowie の説を引いて、父の兄弟は父の死後 *levirate* 婚によつて、己の継父となるので、父称谓で呼ばれるし、他方、母の姉妹はまた同じく *sororate* 婚によつて、父の後妻即ち継母となるので、「母」称谓で呼ばれるとするが、これは疑わしい。これは婚姻称谓と親族称谓の混同であつて、「父」「母」はこの両婚の存在の有無に拘らず、語義の上から見ても、父母としての機能に基いて父母と称谓されるのである。そして郭氏も両婚が配偶者の一方の死によつて生ずる関係なのに、予めその死を予想して「父」「母」と称谓するが如きは、いささか奇異であるといひ、その解釈として、この二種の婚姻型式の同時並行が、何等かの事情によつて先づ社会の一部に行われた結果、父の兄弟を「父」と称谓し、母の姉妹を「母」と称するようになり、それが引いては社会全体の親族称谓制の定例として通用し、己の生みの両親に次いで副次的に「父」「母」として、己を養育教導し保護監督する権限と責任とを有するために、「父」「母」称谓を以つて称呼されたという。しかし、この論は推論に基くに過ぎず、証拠に乏しい。父

の兄弟が実父の存否に拘らず、副次的に父の機能を持ち、母の姉妹が実母の存否に拘らず、副次的に母の機能を持つて、「父」「母」と称谓されるためには、前にも述べたが、*levirate* 婚 *sororate* 婚の同時並行に依るのではなくして、完全に *cross cousin* 婚が行われる事が必要であり、Radcliffe Brown はこの両婚が *cross cousin* 婚という一本の幹から出た二本の枝である事をいう。そして中国に於ては、加藤常賢氏が爾雅釈親に於ける甥舅姑称谓の解明によつて、二族連世交換婚 (*Double cross cousin* 婚) の存在を証明しており、この説は郭氏自身も第六篇に於て舅姑称谓の説明の為に引用しているから承知の筈である。その他、国語晉語・説文・左伝・易経・史記等によつてもかかる形式の婚姻が存在した事は疑いないが、ただ完全なる形式で行われたという証明は未だ発見されていない。R. H. Lowie は *levirate*, *sororate* 両婚が *cross cousin* 婚から出た二本の枝である事を認めないし、従つてこの両婚の同時並行によつて多父多母現象を説明するという誤りを犯したものである。郭氏も亦 R. H. Lowie の説に従つたが故に同じ誤を重ねたものであらう。

次に、同じく「父母称谓考」に於て、郭氏は「父」は称谓としての外に、上代人が冠礼で字名にそえて用いたが、これは同音の「甫」で記される事もある。先儒皆これを「丈夫之

美称」であると説く、冠礼で始めて一人前の男子たる美称の「父」が用いられるのであるから、そこに原初の年齢階級の Men's house 時代を想像してよいかも知れない。さすれば家族制社会組織に進んで、「父」が血縁上輩親の称谓となつても、直ちに己の生みの親たる直系親のみに対する称谓とならず、広く父と同輩親同血縁の傍系親をも指称する称谓となる事が容易に了解されると説く。この事については、先づ年齢階級の存在が中国で証明されていないし、年齢階級なるものは概ね老年・壮年・幼年の三階級又はそれ以上の数が存するのに対し、郭氏に従えば、成人と非成人の二階級のみである。次に中国に於て Men's house の存在は証明されていない、その記録は全く存しない。従つて年齢階級の父なる称谓が、血縁上輩親の称谓に変化した証拠はなく、推論にすぎない。次に「父」なる称谓が、字義よりしてもその機能に基づく事が明らかであるにも拘らず、郭氏は、「父」が手に棒状のものをもつた象形である事は認めるが、子女を鞭撻するとは限らず、民を指揮するか、畜群を追うのか、何とも恣意的解釈を加える事が出来ると述べているが、中国以外の諸民族の例を見ても、「父」なる語は機能の上から出来たものであつて、中国の場合も然ることは疑えない。もし、「家長率教者。从父拳杖」という許慎の説を注釈者の説であるが故に、「父称谓の原義を伝えたものとは看做し難い。」と否定し去るな

らば、「甫、丈夫之美称」という注釈者より以前に「父」字は成立しているものであり、これから年齢階級説をひき出す事は出来ないであらう。

三

概括的な問題としては以上の如くであるが、二三細かな問題について論じてみたい。

先づ第一篇・第二篇に於いて、儀礼喪服の成立について、先秦の諸経に五服を述べるものがなく、荀子の礼論篇に初めて總と小功のみが見える事により、経は戦国末期荀子以後の作であり、記は漢儒の作、伝は漢の武帝以後の作とする。その当否はとも角として、私も亦喪服章の成立はかなり新しいものと見たい。というのは斉衰不杖期章に「継父同居者」があるからで、「左伝」に於いて弟が嫂と婚する事を「通」と非難している事を考えると、「左伝」を以て「儀礼」を論ずる事は必ずしも当らないかも知れぬが、「継父」が「父の兄弟」であつたとは考えられず、喪服の経にも伝にも同姓・異姓を明らかにしない点より見て、異姓の他家から入婿した「継父」であるとしてよい。とすれば、これが血属意識の高かつた周代のものとは考えられない。尤も、喪服は父治・父系・嫁娶制の父権の大家族を以て描かれたものであることは、郭氏のいう通りであり、父・長子・嫡孫・妻・宗子を、

母・庶子・庶孫・妾・宗族より重んじている事は、郭氏の言を待つまでもなく周知の事である。更らに伝に於いては、「繼父」は、(一)夫死妻釋、子幼。(二)子無大功之親、与之適人、而所適者、亦無大功之親。(三)所適者、以貨財為之築宮廟、……若是則繼父之道也。同居則服齊衰期。と宗法に基く厳しい制限すら設けているが、逆からいえば、他家より繼父が入居する事は、制限が厳しければ厳しい程、宗法と矛盾するといわねばならない。經・記・伝と順を追うて、宗法が、事実としてではなく、学説として完成してゆく状態が、郭氏のいう如く、これでもわかる。また郭氏の指摘の如く、經の喪服制が現実の風俗であつたならば、伝は宗子の服の喪期を誤つて三月と解釈する事は無かつたであらうし、また伝の宗法制が現実に行われているか、或いは古くから講説されていた理論であつたなら、無關係の喪服の規定を宗法を以て徒らに着せしようとする事はなかつたであらう。

周の各時代を通じて、嫡庶を峻別し、嫡長子による父子相続が行われ、従つて宗法が完全に行われていたと考える学者は、現在も多いのであるが、「左伝」「史記」より見ても、春秋末期まで、父子相続制と兄弟相続制とは並行して行われたのであり、完全に父子相続制になつたのは戦国時代に入つてからの事である。

第三篇「祖父称謂考」に於て、郭氏は、「祖」は demon

であり、「祖父」とは「祭られた父」の義である。故に第一世の父も祭られたら祖父と称すると説くが、郭氏自身も認める如く、これには証拠がない。また郭沫若氏のいう、祖は生殖崇拜に由来するものであるとの説についても、全く批判が行われていない。前述多父現象の場合もそうであるが、郭氏が甲骨文について言及する事がないのは、遺憾といわざるを得ない。次に、祖父は在世中は「王父」と呼ばれたといひ、曲礼の「孫可以為王父尸。」を引用するが、尸が「かたしろ」である限り、王父を以て在世中の称謂とするのは如何なるものであらうか。

第五篇「伯叔姆嬀考」に於いて、伯仲を依次之称である点から論じているが、依次之称のみに非ざる事については、私は別に述べたので省略する。ただ伯仲を依次之称となす場合、嫡庶の別がないとする論には異議がない。

第六篇「姑嫂舅始と漢族称謂制の側面史」に於いて、一方的 cross cousin 婚での「舅の妻」と「姑の夫」の名称の欠如とをあげるのは卓見であるが、これを Potential wife and husband で説明される事には問題がある。「姪」が「姑」に従嫁して「媵」として「姑の夫」に嫁する事があるのは、郭氏のいう如くであるが、他方、Rivers が報告する如く、Melanesia には「舅の妻」が「甥」と結婚する例はあるが、中国にはその例が見出せないからである。

最後に、第九篇「称呼と命名の排行制について」は、排行制の殆んど全容を網羅した貴重なものである。先づその発生の理由として、(イ)長幼の序 (ロ)実名敬避の風俗 (ハ)親族称谓の通類性の固定化に基くことを述べ、その命名法として、(イ)扁旁を同じくする一字名 (ロ)二字名の一字を共通にする法 (ハ)世輩により(イ)(ロ)を組合わせる法 (ニ)五行を用うる法 (ホ)世数輩行詩を用うる法 (ヘ)字の輩行詩を用うる法等がある事を述べている。

以上聊か批判に過ぎたかも知れないが、要するに郭氏の論は、称谓を中心とする歴史の変遷の追求にその特徴があるが、家族制度研究の態度として、かかる歴史の変遷の考察は今後益々重要性を加えるであろう。氏の論については上述のように、幾つかの異論もあるが、氏は今次の戦争犠牲者として既に亡く、氏の業績に基いて、更に研究を加えてゆくことこそ氏の霊を慰める所以であり、我々中国家族制度研究者の責務でもあらう。

(早稲田大学出版部刊、五四六頁)

王 廣 武 著

五代北シナにおける権力の構造

菊 池 英 夫

本書の著者は、華僑出身で現在マラヤ大学に居られる。先年来日せられたこともある新進の学者である。本書はもと一九五七年まで学んだロンドン大学において、D・C・トイチエット、E・G・プリーリイブランク両教授の指導の下に提出せられたPh・D論文であるという。目次は、(1)序論(2)節度使と唐朝廷、八八三—九〇四、(3)中央権力の成長、八八三—九〇七、(4)梁朝と唐の復興、九〇七—九二六、(5)諸道の支配、九〇七—九二六、(6)宮廷における政治権力、九二六—九四六、(7)諸道の崩壊と新権力構造の出現、九二六—九四七、の七章に分かれ、付録として「五代史における河東と河北との同盟」という小論、それに史料解説と文献目録、中国語名詞・固有名詞についての索引などを付し、諸表と地図六葉とを含んでいる。本書のテーマに関しては、我が国においては、日野開三郎教授をはじめ、戦後における周藤吉之、宮崎市定、堀敏一、栗原益男、矢野主税、志賀義雄の諸氏による論稿があり、筆者も嘗て驥尾に付して論じたこともあり、最近も着実な論稿が生れつつあり、比較的良好に開拓された領域